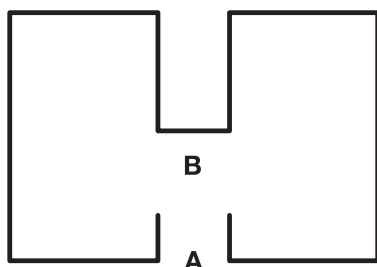


## 机の上の小さな変革



## 補完のはたらき

こんにちは、菅俊一です。今回は、私たちの持っているある認知能力について、実際に手を動かしながら、実感していただこうと思います。

それではまずお手元に、1円玉を1枚用意してください。できたら、上の図に書かれたAがちょうど1円玉の中心になるように置いてみてください。そのときBは隠れずに見えるはずですが。このような感じで1円玉を図に置いてみると、おそらくこの図が「凹」という字のような形に見えるのではないのでしょうか。

続いて、いま図の上に置いている1円玉を、Bがちょうど中心になるように少し上にズラして置いてみてください。そうすると今度はAがギリギリ隠れずに見えるはずです。するといかがでしょう、先ほどまでは凹のような形として見えていた図が、今度は2つの長方形があるように見えていると思います。

## アモーダル補完

いま、みなさんの目の前で起きた、見えている部分を手がかりに隠れた部分を補って想像してしまう視覚現象は、「アモーダル補完」と呼ばれています。

今回は、AとBどちらを隠すかによって手がかりとなる部分の見え方が変わるような図を用意しました。補完

は、見えている部分同士ができるだけ単純な線で繋がるようにはたらいっていたため、Aを隠した場合には凹の形に、Bを隠した場合には2つの長方形として見えたわけです。当然のことながら、1円玉を図から取り去ってしまうと、先ほどまで見えていた形は失われてしまうため、これらの形は、あくまで自分の頭の中だけで存在していた情報であることがわかります。

この図は、上手く段階的に異なる形の補完がはたらくようにデザインされ、隠し方などをガイドしたため、私たちはそのはたらきについて意識することができましたが、通常このような補完のはたらきは、とにかく目の前にあるものだけを手がかりにして、無意識に想像してしまうため、この能力がはたらいて現実の姿とはまったく異なる姿を見ていることに気づくのはとても困難です。私たちが捉えている世界は、必ずしも現実そのままを見ているわけではなく、自らの頭の中できつくり上げている情報が溶け込んでいる可能性もあるのです。

最後に、図の左下の角だけを残して、それ以外を右手で隠してみてください。小さな角だけの手がかりでは、この図の全体像や大きさはイメージできず、小さな四角形があるように見えてしまうと思います。この、すごい補完のはたらきは、ほかならないあなた自身が持っている能力なのです。



## PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。